第８０号
2020年12月1日
発行

同推くん

発行・編集
海蔵地区人権・同和
教育推進協議会広報部
事務局地区市民センター内
電話　３３３－８７７０

新型コロナウイルスと人権

2020年は新型コロナで明け、新型コロナで暮れようとしております。海蔵地区人権・同和教育推進協議会が本年度予定しておりました事業、○総会（6月）、○地区懇談会（7～9月）、○人権を考える集い（10月）、○委員研修会（6・11月）は、新型コロナウイルス感染拡大防止のためすべて中止になりました。唯一皆様に提供できる事業が機関紙「同推くん」です。今回の「同推くん第80号」は、新型コロナウイルスと人権、過去の取り組み、最近の話題について特集することにいたしました。

人権とは「人間が人間らしく幸せに生きる権利」とされています。20世紀は二度にわたる世界大戦をはじめとし、戦争や紛争が多くの尊い命を奪い、人権などあって無いような時代でした。また人類は有史以来、感染症との戦いでもありました。20世紀になって結核、ハンセン病、マラリア、コレラ、赤痢、インフルエンザ、HIV等々そのほとんどが抗生物質やワクチンの開発でこれらを克服してきました。しかし原因が分からず、直すすべがない時代は厳しい差別と迫害があったことは皆さんもご承知のことと思います。そして今回の新型コロナです。2019年の暮れから騒がれ初め、2020年が明けると瞬く間に世界中に蔓延しました。その後一年もたたずに世界の人々が100万人以上も犠牲になりました。日本では国民に対する防疫対策が功を奏し、ある程度感染の押さえ込みに成功しました。しかし新型コロナはその感染力の強さと重症化したときの治療法のないもどかしさから、感染者に対する差別がインターネットという手段を使って広まりました。確かに新型コロナウイルス感染症に対する特効薬は現在のところありません。予防ワクチンもありません。未知の感染に対する恐怖は誰しも持たれることでしょう。しかしこの病気は誰が感染してもおかしくない病気です。誹謗中傷をした人が感染することだってあるのです。私たちに出来ることは、感染防止対策をして、感染リスクを下げること。そして感染症の人に対する偏見や差別を解消するために出来ることは、正確な情報をもとに、正しい理解をもって患者や回復者、その家族の人権に配慮した対応をすることです。

四日市市人権センター「STOP!コロナ差別」のポスターで、こにゅうどう君が次のように訴えておりましたのでご紹介します。

「新型コロナウイルス感染症が拡大する中、誤解や偏見により、感染者や医療関係者とその家族、感染者が確認された事業所などに対する誹謗、中傷やいじめ、差別的な対応といった人権侵害が増加しています。新型コロナウイルス感染症による差別は決して許されるものではありません。

闘う相手はウイルスです。
私たち一人ひとりがお互いの立場に立ち、思いやりの心を持って支えあいましょう。」

20世紀の反省を込め、21世紀は「人権の世紀」といわれています。真の「人権の世紀」にするため私たちは考え、行動したいと思います。　（F）

過去の『地区懇談会』を振り返って

地区懇談会は、過去録の沿革紙によりますと、1995(平成7)年に開始して以来、24年間欠かすことなく、毎年町内の公会所などへ出向き、各町自治会とタイアップする形で開催してきました。内容は、毎回人権に関するテーマを設定し、若干の学習と参加者同士による意見交換を交え、個人から出されたいろんな発言・考えを聞きながら、互いの気づきの機会(人権学習)として行ってきました。しかし、今年は、新型コロナウイルス感染防止対策（密集、密閉、密接）のため、止む無く中止させていただくことになりました。

空いた時間に、この一年間のブランクが果たしてこれまで通り開催することができるか　心配ですが、過去を振り返りながら、今後を考える機会の時間としました。

過去に扱ったテーマを年代順にみますと、『間違った考えや偏見を子や孫に伝えないこと』『いろいろな差別を知り、人権意識を高め感覚を磨こう』『違いを認め合うことの大切さを学び、人権意識を磨こう』『たくましく生きる、被差別部落の若人たちの姿を知ろう』『部落差別の真実を知り、部落差別をなくするために真剣に取り組もう』『みんなで考える人権』『同和問題は解決したの?』『守ろう子どもの人権なくそう児童虐待』『裁判員制度について』『高齢者問題について』『子どもの人権について(子どもの権利条約)』『子どもの人権について(いじめ問題)』『男女共同参画社会の実現に向けて(男女共同参画)』『部落史の見直しについて、学校教育と社会教育の乖離を埋める試み』『人生100年時代をどう生きるか一緒に考えてみませんか』『要介護高齢者漂流時代をどう生きるか、一緒に考えてみませんか』『老後は必ずやってきます。その時どう備えるか、地域の皆さんと事例から学び、話し合ってみませんか?』『無縁社会と家族～生きること　つながること～』『思い込みから、思いやりへのチェンジ(事例を参考に一緒に人権感覚を磨いてみませんか）』と１８のテーマが扱われてきました。読者の皆さまの中には、懐かしく思い起こされる方も見えることでしょう。継続は力なり。先人の方々の努力に敬意を表したいと思います。しかし、この間、わずか24年といえども、地域社会の中では、個の重視、少子高齢化、核家族化、近隣関係の希薄化などと考え方も大きく変化、さらには新型コロナウイルス感染拡大を予防するために注意してきたことが、人々の交流やコミュニケーションの希薄化や日常会話の減少にまで拍車をかけているような気がいたします。ここは、先ずは自己の心や体の健康を第一に、三密にも注意しながら、ご近所同士で声かけあって助け合う、健全な地域づくりの再生を願い、せめてこの地区懇談会だけは、人権感覚を養う場のみならず、ご近所さんとの絆を深め、安心して暮らせるまちづくりの一助とすべく、微力ながらも継続すべきだと改めて思った次第です。そして次回お会いできる時を楽しみにしています。（H）

コロナ禍と人権

●なんと読む？
コロナ禍

コロナ禍てなに？　読み方は？　　**読み方：コロナか**

意味：いわゆる新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が招いた危機的・災厄的な状況のこと。社会的・政治的・経済的な、混乱・不安・損失などを総称した言い方。

今、いわゆるコロナ禍のなか、いろいな差別・差別に対する活動が報道されています。

●コロナ感染者気遣う「結いの島」

8月22日、南日本新聞社のホームページによれば、人口５千人余りの与論島を襲った新型コロナウイルスのクラスター（感染者集団）発生から１カ月が経過。結いが息づく島の住民たちは、県本土の病院から回復して帰島した人たちを「おかえり」「大丈夫だったか」と出迎えたという。新型コロナに感染し、数日前に職場復帰した４０代女性会社員は「テレビで感染者への中傷が取り上げられていたので島に戻るのが少し怖かった。温かく迎えてくれて本当にありがたい」と語っている。

町内では感染が相次いだ当初から、ラインなどで感染した人の名前が飛び交った。他の地域では感染者狩りになりかねない行動が、ここでは正しく理解することにつながり良かったという。与論郷土研究家は「歴史的にも疫病や飢饉（ききん）などの苦難を味わってきた経験から、誰もが感染の可能性がある中、感染した人を非難する考えには至らなかったのでは」と話している。今こそ気持にゆとりを持ち冷静になることが大切なようです。

●シトラスリボン運動のご紹介

コロナ禍で生まれた差別、偏見を耳にした愛媛の有志がつくったプロジェクトです。「地域」「家庭」「職場(または学校)」を象徴する3つの輪をかたどったシトラスのカラーリボンをつけ、「ただいま」「おかえり」の気持ちを表す活動を広められています。思いやりの輪を広げて、新型コロナウイルス感染者や医療従事者への差別をなくそうというプロジェクトで、愛媛県発でいま全国に広がりを見せています。

一人ひとりができることを「ちょびっと」ずつ始めようという気持ちから団体名は、「ちょびっと19＋」。

●東京差別

新型コロナウイルスの感染が、1日に200人を超えるなど、緊急事態宣言が終わった後に再び感染拡大する中で「東京差別」と言う言葉がテレビやネット・SNSなどで広まっています。

事例としては、

・東京在住の人が田舎の親から帰省するなと言われた。

・6月には、岩手県内で、県外からの転入生に登校自粛を要請していたことが、SNSで波紋を広げた。

・7月に入ってからは、「都内のナンバーをつけているからか、車が傷つけられた」等・・・

人は、目に見えない恐怖に遭遇すると不安になり、見えている「何か」「誰か」を攻撃し、排除することで、恐怖から逃れようとするようです。

戦うべき相手は「新型コロナウイルス」です。どうか冷静になりましょう。

●「これが差別か」と思った、男性の話

福岡市に住む38歳の自営業の男性は、３月下旬：体温38.5度、コーヒーの味がしないので、内科に電話。内科は「薬を出す」「病院には来ないでくれ」との対応。保健所は「検査できない」と門前払い。

4月4日：陽性と判明。保健所は「入院できる病院がない」「とりあえず家で耐えてくれ」薬ものむな…。その後高熱で病状悪化、自分で入院できる場所を探し、11日間入院後検査で２回陰性となりやっと退院。

新型コロナウイルスが陰性となって退院したあと、肺炎の経過観察を病院にお願いしたところ「もしあなたがコロナの発生源になったらうちの病院も困るんで」などと8件断られたといいます。（参考：ＮＨＫ特設サイト）

今、差別に対する人権を守る動きが、各自治体で始まってきました。

三重県の場合は『差別の禁止』県が明記　　令和２年９月２７日　中日新聞朝刊より

罰則設けず　　感染症対策条例で中間案

新型コロナウイルス感染症対策を検討する県と医療関係者による協議会の会合が二十五日夜、県庁で開かれた。県側は年内の制定を目指す県感染症対策条例（仮称）の中間案を示し、「差別の禁止」を明記する方針を打ち出した。パブリックコメントなどを経て最終案をまとめ、十一月の県議会に提出する。中間案で示した差別の禁止は、県内でも新型コロナ感染症らへの誹謗中傷があったことなどを踏まえた。罰則は設けないものの、感染者や家族、医療従事者のほか、国籍、性別などを例示し、いわれのない差別を禁じる。さらに、感染症のまん延を防ぐため、県や市町、事業者、県民の役割を定める。県の役割の一つには、差別につながらないよう正確で適切な情報を積極的に公表することを挙げている。

また、以下のような記事もありました。

「闘う相手は人間ではなくウイルス」コロナ感染者らへの中傷が相次ぐ中、ある市が出した宣言とは

新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、千葉県松戸市が「人権尊重緊急宣言」を発表しました。

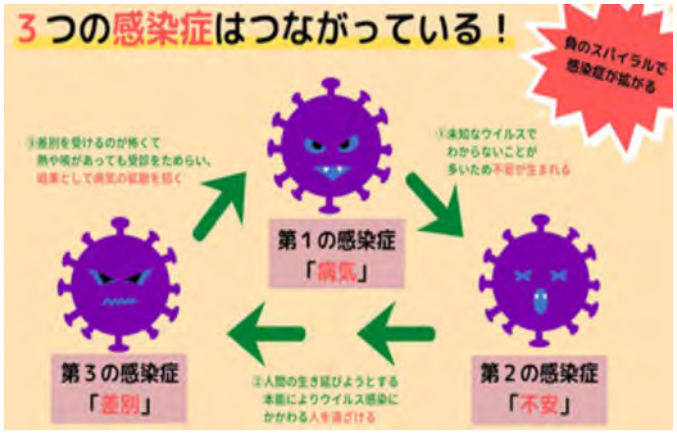
宣言は、新型コロナの感染者や、医療・介護関係者ら、またその家族への差別や偏見、いじめに反対するものです。

宣言では「差別や偏見は決して許されるものではありません」と明言し、「闘う相手は人間ではなくウイルスです」と指摘しています。　【 BuzzFeed Japan ／ 冨田すみれ子 】

「差別や偏見は決して許されるものではありません」

宣言では、感染者やその家族、または医療や介護の現場の最前線で働く関係者など「社会生活を支えるため日々奮闘している多くの関係者やそのご家族に対する差別・偏見やいじめ等が社会問題となっています」と指摘。

そのような差別に対し市は、「人権は、いかなる場合でも尊重されるべき基本的な権利であり、このような差別や偏見は決して許されるものではありません」としました。また、「感染のリスクは誰にでもあります」とした上で、「偏見や差別的な言動に同調せず、正しい情報と知識に基づいた行動をとることがなにより大切です」と述べています。



鳥取県米子市では「新型コロナウイルスに関する人権侵害を防ぐ、3つの宣言」として、以下のことを掲げています。

1：感染者を非難しない

感染は誰にでも起こる可能性があり、感染者は非難される対象ではなく、守られるべき存在です。「自分が感染したら…」と考えた時に、他の人からされたら嫌だと思う事は、他人にもしないという気持ちを持ちましょう。

2：感染者の出た職場や家族を非難しない

感染者だけでなく、その職場、家族などへの誹謗中傷や差別的な言動は、感染の表面化を遅らせ、感染拡大防止の妨げになることを認識しましょう。

3：風評被害を防ごう

感染していないにもかかわらず感染者だという噂を流され、本人のみならず、家族や勤務先が差別被害にあうという事例が見受けられます。新たな風評被害を生まないために、誤った情報や不確かな情報をむやみに拡散しないようにしましょう。

※新型コロナウイルス感染症関連の差別がなくなることを願ってこの原稿を編集しています（Ｓ）

「人権を考える集い」のちらしより

海蔵地区においては、毎年１０月の第一土曜日は、「人権を考える集い」として、昨年まで、２８年間途切れることなく開催してきましたが、今年は新型コロナウイルス感染症対策のため、会場内における感染防止を図る観点から中止となりました。

今後においては、感染防止を意識した、新たな生活様式に基づいた行事、イベントが展開されてくることでしょう。

新たなスタイルが検討されるまでの間、資料の残っている過去のちらしから、取り組んできたテーマなどを振り返りながら、今後の展開の一助としたい。

（H）

第24回　平成27年(2015年)
テーマ　『市民と戦争～見捨てられた民間被害者から』
講師　岩崎健彌さん

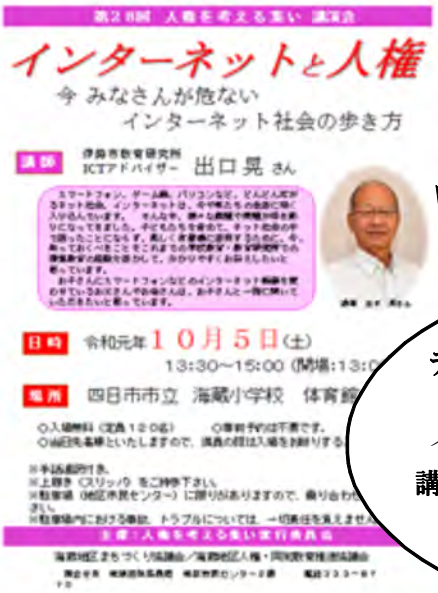
第二次世界大戦後70年を経てもなお苦しむ人々がいます

第25回　平成28年(2016年)
テーマ　『共に生きる社会をつくるために』～私たちの声を聞いて、そして一緒に感じよう～
出演　あいプロジェクト
風の家
わかば共同作業所
ライブ　親子デュオＲＡＭＯ

第26回　平成29年(2017年)
テーマ　『障害のあるなしに関わらず住みよい街づくりを』
講師　田中宏幸さん
合理的配慮など「障害者差別禁止法」を学ぶ

第27回　平成30年(2018年)
テーマ　『インクルーシブ防災と地域の助け合い』～すべての人に配慮した災害対策～
講師　水谷真さん

東日本大災害など被災地における支援活動から見えた実態と今後の課題、地域のあり方



第28回　令和元年(2019年)
テーマ『インターネットと人権』
～今　みなさんが危ない
インターネット社会の歩き方～
講師　出口晃さん
ネット社会　自分を守ることや周囲に迷惑をかけない使い方を学ぶ

ちょっといい話

10月２日の読売新聞朝刊に掲載されていた記事の中から

「レディース・アンド・ジェントルメン」やめます
～JAL機内放送、性的少数者配慮～
既にご承知の方もたくさんお見えになると思いますが、ご紹介させていただきます。

『日本航空(JAL)は１日、機内での英語アナウンスで使用していた、「レディース・アンド・ジェントルメン(女性、男性の皆さん)」という呼びかけを使うのをやめ、「オール・パッセンジャーズ(乗客の皆さん)」などに切り替えた。性別を前提とした表現を改め、性同一性障害など性的少数者に配慮した。

英語のアナウンスは、機内のほか空港の搭乗口などで放送されている。

１日からは、JALが現在運航しているすべての機内で文言を切り替えた。

空港内では、「グッド・モーニング」と言った呼びかけに改めた。

JAL広報部は、呼びかけの言葉について「性別を特定した表見ではなく、中立的な表現が望ましいと考えた」と説明している。』

わたしは、この記事を読んで、既存のしきたりや慣習にとらわれることなく、おかしいなと思った時に、実践できる、新しい生活様式に切り替えることのできる行動力と柔軟性にエールを送ります。（H）

同推くん　コラム

2020年を振り返って

「同推くん」は早くも12月１日号になりました。 2020年も終わりに近づいています。今年は誰にとってもコロナに振り回されたという1年だったのではないでしょうか? あっという間に1年が過ぎ去って行きました。 私達の町　海蔵地区でも各種のイベントはすべて中止になり非常に淋しい1年になりました。経済的にも厳しい状況が続いています。 現代に生きる人間にとって初めての経験で一旦終息するかに見えましたが、今だに感染者が止まりません。 これは傲慢になりすぎた人類に対する神様からの警鐘でしょうか?

コロナに対する不安の上に追い打ちをかけているのがコロナ疾患者、医療従事者への差別・偏見です。悲しく、恐ろしい事です。

苦しい毎日が続く中、役員研修会を開催し、その中である資料を読み心惹かれる一文に出会いました。それはある人が言った「安心して感染したい」という言葉です。どういう事かというと、「感染したことがわかったら、噂になったり、村八分になったり(今時、21世紀の世の中で!!)するので不安だというわけです。

「噂するのも、村八分にするのも、陰口を叩くのもウイルスじゃない。『人間』なんです。」この言葉に非常に感銘を受けました。

ウイルスは人間が作ったものではありません。しかし差別や偏見は人間が作ったものです。人間が作ったものは、人間が撲滅する事ができると信じています。

コロナ以前の生活に戻るには、まだまだ時間が必要でしょう。 細心の注意を払いながら生活していかなければなりません。
そして、コロナの終息と共に、差別や偏見も終息している世界になっている事を祈ります。（O）

◎同推くんのバックナンバーは、『かいぞう地区』のホームページからご覧いただけます。
http://www. kaizotiku. org/